福山市立大学教育学部研究紀要，vol. 8, pp. 35-43, 2020
doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

幸せの国ブータンの就学前集団教育に関する調査研究（報告）
── 私立幼稚園３か園の現地調査から ──

小林　小夜子[(1)]

主観的幸福感が高いブータン王国における就学前集団教育について現地調査を行った。調査協力園は，私立幼稚園３か園であった。インタビュー協力者は，園長または保育者であった。３か園に共通していたことは，保育料は有料，園バス保有，３歳以上児を対象，文字の読み書きを実施，英語による授業，弁当・水筒持参，２種類の保育時間，などであった。文字の読み書きに力が入れられていたことは，日本と大きく異なることであった。鉛筆の持ち方が，全員正しかったことを観察した。これは，保育者が個別指導を丁寧に行っていたことに起因すると考える。年長クラスになると，一人用机で読み書きを学ぶ姿は，日本における小学校教育と類似していた。これは，小学校入学にむけた１年前からの教育が基礎教育期間の始まりとされていることと関連があると考えられる。また，２種類の保育時間があることは，現在の日本における認定こども園に近似している。今後，ブータン王国における就学前集団教育に関する研究を進めていくことは日本の保育への貢献が期待される。

キーワード：国民総幸福，ブータン王国，就学前集団教育，私立幼稚園

１．はじめに

ブータン王国（Kingdom of Bhutan）の概要

ブータン王国について日本国外務省ホームページ[1)]から，また最近の論文[2)]や旅行ガイドの書籍[3)]から，以下に概略を紹介する。

ブータン王国は，ヒマラヤ山脈南麓に位置する九州とほぼ同じ面積（約3.8万平方km）でありながら，北部の高山帯は海抜7,000m以上，南部の亜熱帯は300mと標高差の厳しい地勢で，インドと中国という大国に挟まれている（図１参照）。人口は約70万人で，そのうちの約8割はチベット系住民であるが，ネパール系住民や少数民族も暮らす多民族国家である。正式な国名は，国旗（図２参照）に描かれた竜の国を意味する「ドゥック・ユル」で，チベット系仏教（ドゥック派）を「国家の精神的な遺産」としている。そのため，仏教は宗教建築物や人々の習慣など生活のいたるところに根づいているが，ヒンドゥー教など他の宗教の自由も保障されている。就労人口の約６割が農業に

図1　ブータン王国の位置（出典：外務省ホームページより）

図2　ブータン王国の国旗（出典：外務省ホームページより）

(1) 福山市立大学教育学部児童教育学科　e-mail: s-kobayashi@fcu.ac.jp

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

従事し，公用語はゾンカ語，普通教育はほぼ英語で行われている。準公用語的な扱いである。

1人当たりの国民総所得は1,920米ドル（世界銀行，2010年）であるにもかかわらず，国勢調査（2005年）ではブータン国民の約97％が「幸せ」と回答している。第4代ジグミ・シンゲ国王は，「国民総幸福量（GNH）は国民総生産（GNP）よりも重要である」と，1970年代にGNHの概念を提唱した。GNHは，経済成長を重視する姿勢を見直し，伝統的な社会・文化や民意，環境にも配慮した「国民の幸福」の実現を目指す考え方である。その背景には仏教の価値観があり，環境保護，文化の推進など4本柱のもと，9つの分野にわたり，「家族は互いに助け合っているか」「睡眠時間」「植林したか」「医療機関までの距離」など72の指標が策定されている。国家がGNH追求のために努力することは憲法にも明記され，政策を立案，調整するGNH委員会が重要な役割を担っている。

国民総幸福量（GNH）の4つの柱とは，①持続可能な社会経済開発　-Promotion of sustainable development-　②環境保護　-Conservation of the natural environment-　③伝統文化の振興 -Preservation and promotion of cultural values ④優れた統治力 -Establishment of good governance-である。また，国民総幸福量（GHN）指標の9つの分野とは，①心理的な幸福，②国民の健康，③教育，④文化の多様性，⑤地域の活力，⑥環境の多様性と活力，⑦時間の使い方とバランス，⑧生活水準・所得，⑨良き統治である。

「豊かさ」と「幸福度」の世界ランキング

このようなブータン王国について，豊かさと幸福度の国際比較を行った。表1には豊かさの国際比較を示し，表2には幸福度の国際比較を示している。表1から経済成長率が目覚ましく，また，表2から主観的幸福度が高いことが理解できる。

ブータンの学校教育制度

日本は，6（小学校）・3（中学校）・3（高校）の学校教育制度を採っている。一方ブータンは，7（就学前・初等）・6（中等）・3（高等）の学校教育制度を整備した。就学前教育（Pre-primary　School：

表1　豊かさの国際比較

調査機関（発表年）	IMF（2018）	IMF（2018）	UNDP（2018）	IMF（2018）
指標	名目GDP	一人当たりGDP	人間開発指標	経済成長率
対象国数	191カ国	190カ国	181カ国	191カ国
ブータン	165位	128位	134位	11位
日本	3位	25位	19位	147位

出典：International Monetary Fund (2018), IMF Country Information, Retrieved from https://www.imf.org/en/Countries
United Nations Development Program (2018), Human Development Reports http://hdr.undp.org/en/2018-update

表2　幸福度の国際比較

調査機関（発表年）	A.White（2007）	国連（2018）	NEF（2018）	WIN/GIA（2017）
指標	主観的幸福感	世界幸福度ランキング	地球幸福度指数	世界幸福度調査
対象国数	178カ国	156カ国	140カ国	55カ国
ブータン	8位	97位	56位	ー
日本	90位	54位	58位	18位

出典：White A. (2007) A Global Projection of Subjective Well-being: A Challenge To Positive Psychology? Psych-talk, 56, 17-20.
United Nations (2018), World Happiness Report 2018, retrieved from http://worldhappiness.report/ed/2018/
New Economics Foundation (2018), Happy Planet Index, Retrieved from http://happyplanetindex.org/countries
Gallup International's 41st Annual Global End of Year Survey (2017). Happiness, Hope, Economic Optimism, Retrieved from http://www.gallup-international.com/surveys/happiness-hope-economic-optimism/

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

Class　PP）は６歳，初等教育（Primary　School：Class　Ⅰ-Ⅵ）は７歳から12歳，中等教育は13歳から18歳（Junior　Secondary　School：Class　Ⅶ-Ⅷ，Middle　Secondary School：Class Ⅸ-Ⅹ，& Higher Secondary School：Class　Ⅺ-Ⅻ），高等教育は19歳から（Royal University of Bhutan：Royal Thimphu College）とし，Class PPからClass　Ⅵまでの７年間（就学前・初等）を基礎教育機関として，学齢児童皆学達成を目指している。公立学校は，大学まですべて無料である[4)]。

ブータンの幼児教育に関する先行研究

幸せの国ブータンの子どもたちに関する報告はいくつかある。例えば，NHK「ドキュメンタリーWAVE」取材班とアグネス・チャンによってテレビ放映され，ブータン王国への関心が高まり，書籍が出版された[5)]。しかしながら，その書籍には幼児教育に関する記述が非常に少ない。

ブータン文化の特徴は，100年以上続くチベット仏教カーギュ派の教えである，互助・互恵，知足・少欲，平和，平等，富の公平分配という考え方が幼児から高齢者まで世代を越えて深く浸透しており，徹底している[6)]。しかし，幼児に関する記述は，教育に限らずあまり多くない。

幼児教育に関する記述として，家族計画の中で論じられている論文[7)]があった。これによると，ブータン政府が1997年に提示した家族計画では，一家族（核家族）に望ましい子どもの数は３人であった。ところが翌1998年には，２人へと減少している。これは，首都テインプーにおいて子どもへの教育に高い関心が寄せられている状況を反映してのことである。つまり，首都では一家族が養育する子どもの数を減らして，十分な教育を受けさせたい，という考えが強まっていると指摘している。

ところで，黒岩（2007）[8)]はブータンの子どもの生活と遊びの変容について論じている。ここでは，幼児ではなく子どもとして広く取り扱っており，小学生以上を中心に述べている。すなわち，2001年にテレビ放送が始まり，いまや携帯電話も普通に使いこなされているほどである。リアルタイムで世界をかけめぐるニュース，無造作に映し出される各国からのテレビ番組，規制はあるものの以前にはなかった多数の旅行客の受け入れなど，人，物，そして情報流入により，ブータンはまさしく変革をたどっており，将来に向けてどのような選択をしていくかという時代にきている。こうした中にあり，子どもの生活に変化が見られ始めている。首都だけではなく，都心部を離れたパロ県・ブナカ県にも同じことが言え，ただ電気が入ることだけで，村全体の生活様式が変容したケースも見られる。このように急激な生活の変化を指摘している。

加えて，農家では母系家族の中にあって，その親族によって教養を身につけさせているのが現状である。目上の者や兄，姉が先生であり，僧侶をとても敬う。父親が亡くなったり，父が遠出したりしている時は，母方の祖母ないし姉など，この他地域で連帯して児童教育をしていると言っても過言ではない。特に母親は主要な教育者であり尊敬されている[9)]。

角谷（2014）[10)]は，ブータンの教育政策動向から幼児教育の問題・課題をとらえている。これは，政権交代のちょうど１年前の2012年７月にブータン文部省が2011年４月から2012年４月までの１年間における学校教育の展開状況をまとめ，“Early　Childhood Care and Development”に関する項目が問題・課題有りと指摘したのである。

ブータンにおける教育政策は「4．Human Development」に分類されている。そこではまず「意味のある教育」（“meaningful　education”）を展開しなければならない，といった見解が提示され，そのためには教育によって子ども達が必要な技能を身につけ自分が望む将来像を追求できるように，といった方向性が打ち出されている。しかし，失業状態から“荒れて”ゆく若者の実態の認識のあり方や対応方法は，政党間で異なっていた。DPT（Druk Phuensum Tshogpa）[注1)]政党は失業問題としてだけでなく，児童・生徒の素行（非行）問題等の対策に向けて，幼児教育なども重視していると報告している[11)]。

その後の2015年に行われたGNH調査に基づき，第12期５か年計画は，以下の基本方針に基づき実施されていく。すなわち，その基本方針は，①農民の要望を最優先事項とする，②若者の就労環境を整える，③精神的幸福度を高めていく，④教育の質を高め，カリキュラムやトレーニングの機会を充実させる，⑤住民参加の機会を充実させる，⑥農村地域の環境を改善し都市と農村の格差を是正する，の６項目である[12)]。

このように，GNHとかかわって多方面からの改革

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

がみられるようになったが，幼児教育に関しては，この数年で重要視され始められたと言っても過言ではない。そこで，社会構造の変革の中で，GNHという精神的価値をどのように育んでいくかについて，ブータンにおける幼児教育の取り組みをとらえることは，今後我が国における幼児教育に示唆をもたらしてくれると考える。

2．研究の目的

ブータンの就学前集団教育の現状を現地調査によって把握し，我が国の幼児教育・保育の在り方を検討することを目的とする。

3．調査方法

・調査場所…ブータン王国パロ県内

・調査協力園…私立３か園の就学前集団教育施設および関係職員

・調査時期…2018年10月16日～17日

・調査手続き…ブータンでの調査にあたり，旅行会社を通じて見学およびインタビュー協力園を探してもらった[注2)]。その結果，私立３か園の就学前集団保育施設から協力が得られることになった（ここでは，便宜上幼稚園と表現する）。ビデオ撮影，写真撮影，フィールドノートにより記録を行った。現地旅行会社スタッフによる日本語・英語・ゾンカ語の通訳を介して，半構造化面接法によるインタビューを行った。

・倫理的配慮…現地旅行会社を通じて，写真撮影，ビデオ撮影等全面的に許諾が得られた。協力園がリスクを負うことがないよう，十分配慮を行った。

4．調査結果

【A調査協力園の場合】

A園は，国際空港のあるパロ県内の中心市街地から約２㎞に位置する私立の幼児教育開発センター（Early Childhood Care & Development Centre ＝ ECCD）である。園長にインタビューを行った。

（設立と設立目的）

2013年に設立された本ECCDセンターは，この地区で幼児教育と質の高い保育を提供するために，今回インタビュー回答者である園長自身が設立した。奉仕する子どもたちに質の高い環境で豊かな学習環境を提供することに尽力している。園長は，24年間小学校教員として勤め，その退職金などで本ECCDセンターを設立した。設立と運営に関して国からの支援は受けていない。すべて自己運営である。

（園長の経歴）

園長は，これまでに３年間のTeacher Training Courseを経て教員になった。また，２年間の通信課程を経て，３年間の教育を受け，教育学士（Bachelor of Education）を修得している。

（教育の目的）

本ECCDセンターでの教育目的は，本センター終了時に子どもが以下の６つの領域でスキルと価値を発達させることである。

1）身体的健康，健康，および運動発達（Physical Health, Well Being, and Motor Development）

これには，子どもがいかに上手く自分の体と五感を使い，自分の世話をし，身体的にフィットさせ，危険な状況を避けることができるかが含まれる。

2）社会的および感情的な発達（Social and Emotional Development）

子どもたちは，自分自身を表現し，自分の独自のアイデンティティを理解することを学ぶことができ，安全に育てられる「家から離れた家」を楽しむことができる。

3）言語，識字能力，およびコミュニケーション（Language, Literacy and Communication）

子どもたちは口頭および非口頭で他の人とコミュニケーションをとり，周囲の世界と交流する。彼らは新しい友達を作り，健全な関係の中で生涯に必要な自信，自尊心，交渉スキルを獲得する。

4）学習へのアプローチ（Approaches to learning）

これには，新しい経験や学習への関心を示すこと，イニシアチブを示すこと，想像力と創造性を使用すること，困難な時にあきらめないことが含まれる。

5）認知と一般的な知識（Cognition and General knowledge）

これには，なぜ起こるのかといった理屈を理解することが含まれる。問題を解決するためにさまざまな方法を試す。数字についての理解，数え方，その他の基本的な数学の概念，それらの周りの世界の観察と理解，過去と現在と未来を理解し，互いに関連する場所の感覚を持つ。 所有権に関する基本的な考え方をわかる。

6）精神的，道徳的，文化的発展（Spiritual, Moral and Cultural Development）

子どもたちは敬意，帰属意識（アイデンティティ），そして自分の国と文化への愛を示すことを学び，精神

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

性を示し，責任を負うことを学ぶ。

（我々のビジョン）

本ECCDセンターのすべての子どもは幸せで，健康で，独創的である。

（我々の使命）

子どもは貴重な贈り物である。これらの贈り物である子どもを，時間をかけて検証された実践的な経験を通して育て，良い人間になるための支援ができることは私たちにとって光栄なことである。

すべての子どもに知的，社会的，身体的，感情的，社会的に利益をもたらすように設計された活動を通じて，成長を促進させる。

私たちは，愛情をもって育て安全な雰囲気の中で，すべての子どもたちに知的刺激を与える。すべての子どもの家族は，子どもの全体的な発達において相談ができ，促進されるようにする。

（我々のモットー）

国民総幸福のための種を育てる。

（我々の価値）

礼儀，誠実さ，責任，熟練度，共有と感謝（協力），自己規律，感謝（謝意）に価値を見出している。

（開園日と保育時間）

本センターは２学期制をとっている。第１学期は２月25日から６月30日まで，第２学期は７月15日から11月30日までである。夏休みは７月１日から７月15日まで，冬休みは12月18日から２月24日までである。原則として子どもの預かり時間は，月曜日から金曜日までの８：30～15：00と８：30～17：00の２タイプがある。

（クラス編成）

クラスは，年齢によって３学年で構成されており，１クラスに２人の教員を配置している。教育の質を保つため20人以上のクラスにはしたくないと考えている。

３－４歳：Nursery，24人（１クラス12人で構成され，２クラスある）

４－５歳：Lower Kindergarten，20人

５－６歳：Upper Kindergarten，20人

（センターの日課）

到着時に歓迎

モーニングサークルタイムとストーリータイム

スナックタイム

計画カリキュラム（テーマ教育）

昼食

ガイド付きアクティビティ

アートと絵画

シザーズアクティビティ

初期のリテラシーと数学のスキル。

無料プレイ/個人アクティビティ

ヨガリーン＆プレイ

瞑想

視聴覚クラス

（料金体系）

表３に示すとおりである。

表３　料金体系

料金の詳細	Nuによる金額（1 Nu=1.7円，2018年2月時点）	支払いのタイミング
登録	Nu 100:00	登録時
入園料	Nu 500:00	登録時
保育料	Nu 25,000:00（午前８：30～午後3:00までの保育）	1年間
	Nu 28,000:00（午前8:30～午後5時までの保育）	
おやつ	Nu 1,000:00	1年間
文房具	Nu 1,000:00	1年間
合計	Nu 27,600:00	2回に分けて支払い可能
	Nu 30,600:00	

以上のほか，具体的な質問を行った。

本ECCDの発展について

設立時は，14人だったが，年々希望者が増加している。これ以上増やしたくない。子どもが幸せであることが，大人の幸せ，コミュニティーの幸せにつながり，そして最終的にGNHが達成できると考える。そのためにベストの教育をする。

親が子どもを預ける理由

子どもを預ける理由は，２つ。両親が働いていて子どもの面倒を見ることができないことと，子どもに良い教育を与えるため。

最近の子育てで心配なこと

最近では，スマホによって子育てが悪い影響を受けている。スマホに子育ての手伝いをさせている親もいる。子どもの言語的発達に遅れが生じやすく，特に５

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

歳以下には悪い影響があると考える。コミュニケーションをとらない子どもになると考える。それらのことを親に話すようにしている。インターネット，テレビなどで世界のいろいろな情報が入ることは，ネガティブな影響を子どもに与える可能性があると感じている。さらに，子どもたちのライフスタイルも変わっていることが心配である。例えば，服装など，文化が壊れる心配がある。このようなことについて，一つ一つ親に話し，共有してもらうことにしている。

英語教育について

英語は，Upper Kindergartenで教えている。読み書きも含めて。あまり早い段階，例えば，3歳，4歳，5歳で，勉強を教えるのは，子どもの心の成長にとって良くないと考えている。

保護者との信頼関係

園と親は信頼関係があると思う。特に園長自身が，小学校での教員経験が豊富であることが理由だと感じる。保護者はポジティブな反応しかない。その証拠として，子どもの数が増えていることがあげられる。

本ECCDセンターの先生たち

本センターの教員は，専門的な教育を完全に受けている先生は，自分（園長）を除いていない。そのため，自分が他の先生たちを指導している。長期の休みに海外，インドやタイに，できればシンガポールに勉学に行かせたりしている。また，自分自身も海外で研修している。

午前のティータイムで

お茶とおやつをみんなで頂く。訪問日のこの日は晴天であったため，青々とした芝生の園庭で子どもや先生たちと一緒にくつろいだ。

弁当について

子どもたちは，全員各自弁当と水筒を思い思いのリュックに入れて持参している。

【B調査協力園の場合】

園長にインタビューを行った。

パロ県にある学校である。幼稚園，小学校，中学校を有する。鉄筋コンクリート造りの大きな学園である。インタビューの回答者は，幼稚園園長と小学校の校長兼ねている。ちなみに中学校は園長の夫が校長をしている。

3歳から5歳までの幼児を教育しており，6歳は，pre-school 1年生として小学校の校舎で教育を受けている。本幼稚園では，英語と国語の特別教員がおり，各クラスを交代しながら専門的に指導を行っている。子ども専用の一人机に一人ずつ腰掛け，先生が教室前方に着席し，指導を行っていた。日本の小学校の教育スタイルであった。

小学校1年生から6年生の各クラスの授業風景を見学させてもらった。小学校の各クラスは10人から15人程度で構成されていた。1クラスに教員が2人いるクラスもあった。さらに，子どもたちへもインタビューをさせてもらった。どの年齢の子どもも将来の希望を抱いていた。性別にかかわりなく医者やエンジニアを希望する子どもが多かった。

各クラスを見学やインタビューをしたところで，昼食時になった。昼食は，幼稚園，小学校の順に取る。食堂に各自自分の弁当と水筒を準備し，全員集まったところで一緒に食事をとっていた。

【C調査協力園の場合】

C幼稚園は，パロ県にある幼稚園である。

訪問した日は，園長不在のため，年中児クラス担任にインタビューを行った。

正座式机を4人で使用し，鉛筆や消しゴムは共用で机の中央部分に置かれていた。セメントの床にじゅうたんを敷いており，その上に机（座卓）が配置されている。いたるところに英語の単語が貼られている。子どもは，上下のジャージ姿である。これが，制服のようである。訪問時刻は，ちょうど14：30くらいであったので，早く帰宅する子どもと迎えに来た家族で込み合っていた。幼稚園バスもあり利用する子どももいる。

ひと段落ついたところで，英語の書き取り練習を行っているところを見学した。全員が鉛筆を持っている。その正しい持ち方に筆者は驚いた。なぜなら，これまでの筆者の経験では，正しく持っている日本の大学生は少ないからである。指導の様子を見学すると，一人一人に正しく書き順と鉛筆の持ち方を指導していた。部屋には電灯はあるが，明かりはつけられていなかったので，少し薄暗く感じた。

教員になる前は，どんなことをしていたのか尋ねたところ，普通の主婦をしていたと答えてくれた。子どもが大きくなったので，この幼稚園に入れて自分と一緒に通っている。教育の経験はなかったが，夫の実家がこの幼稚園の経営に携わっているので，教員として

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

働くようになった。まだまだ未熟であるので，これから勉強をしていきたいとのことであった。

【見学３か園に共通に見られたもの】

・保育対象は，３歳から5歳である。
・私立である。
・保育料は有料（公立は無料）である。
・保育室に国王と王妃の写真が飾られている。
・園バスを保有している。
・３歳以上児を対象としている。
・英語による授業（日本における小学校での教育スタイル）を行っている。
・文字の読み書きを実施している。
・給食はなく，弁当・水筒持参である。
・保育時間が２種あり，日本における認定こども園に類似している。

【3か園に相違がみられたもの】

・指導者の資格
・教材・教具の豊富さ
・保育室と食事の異同

５．考察

ブータンの幼児教育は始まったばかりである。

A協力園は，ブータン国文部省が打ち出したECCDセンターという形式で運営されていた。ちょうど2013年に開設されたということから，角谷（2014）[13]が紹介しているように，文部省の指摘を基本に開設・運営されていると考えられた。

B協力園とC協力園は，建物の状況から，また，Preschoolという名称から判断すると，文部省がECCDを打ち出す以前に開設されていたと考えられる（実際はインタビューしていない）。

また，C幼稚園の教師が，特段の資格を待たず，家庭で子育てをある程度終えてから教師として働くようになったことについては，ブータンでは母親が主要な教育者であり尊敬されるという（黒岩，2007）[14]の報告と合致する。日本でいうところの「保育ママ」と類似していると思われる。しかしながら，教育・保育者養成という観点から捉えると，ブータン国として，大きな課題が残されていると感じられた。これはA協力園の園長が保護者との信頼関係があると判断する１つの要因として，園長自身が教育学士を有しているという要因をあげられたことから推察される。したがって，ブータンにおける就学前集団教育の課題の１つとして，保育･教育者の資格に関する課題に取り組むことがあげられる。

A協力園において日課に「瞑想」があった。この瞑想については，調査時間の都合上，実際に見学することができなかった。しかしながら，この「瞑想」は，幼稚園だけでなく小学校も取り入れられているようだ[15]。この瞑想は近年，マインドフルネスの観点から世界中で注目されている[16),17]。これを幼児期の教育に取り入れていることは，精神的安定と深くつながるものと期待される。このことがブータン国におけるＧＮＨの高さに関与する要因の１つとして考えられる。このようなことから我が国においても「瞑想」を就学前集団保育の保育内容として取り入れることを期待する。

最後に，いずれの協力園において，２種の保育時間が準備されていた。これは，近年我が国で取り入れられている認定こども園と類似している。この運営の様子をさらに検討していくことは，我が国におけるこども園での保育の在り方に対して，大いに参考になると期待される。

注

注１　DPTとは，ブータンにおける２大政党の一つである。2018年10月18日開催の大統領選挙に向けて２大政党のマニフェストが2018年10月15日付の新聞紙“KUENSEL”上に掲載されている。それによるとDPTは，“Druk Phuensum Tshogpa（DPT）”とあらわされている。もう一つの政党は，DNTで“Druk Nyamrup Tshogpa（DNT）”とあらわされている。

注２　ブータンでの現地調査がいかに困難であるか，引用文献７および引用文献８の中で以下のように紹介されており，現地調査は，観光ビザで入国し現地旅行会社の紹介による方法を採用せざるを得ないのである。

引用文献７では，「ブータンでは，1974年にはじめて団体による外国人観光の入国が許可されて以来，独自の観光政策を採用してきた。ブータンの文化や伝統，自然環境が急速に失われてしまわないように，旅行者の滞在日数と年間の観光客数には，制限が加えられている。そのため，現在，海外からの観光客は一人一日200ドルを支払って観光ビザを取得し，許可の下りた地域のみ観光できるというシステムになっている。（中略）同じように調査旅行にも制

doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

約が加えられており，単独で調査ビザを取得し，ブータンに長期滞在することは困難なことが多い。その場合，一般に観光客あるいは招待客としての入国となる。こうしたブータン王国の状況そのものが，調査のあり方や観光開発などを再考する重要な素材であると言える。」（p. 75　注２）と紹介している。

引用文献８では，「ブータンの旅行事情として，ガイドと運転手を伴わなわなければならない。また，滞在費も高額であり，単独行動は認められていないため，容易に長期滞在はできない国である。今回の旅も現地滞在は，わずか６日間である。そのためこの研究報告は，ただの一旅行者の印象記にすぎないかもしれない。」（p. 19）と記述紹介されている。

引用文献

1）外務省 https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol79/index.html　2018年９月10日引用

2）Kinlay　Tshering（訳：石川幹子）（2017）ブータン王国における国民総幸福量とジェンダー　学術の動向　22（11）58-61

3）『地球の歩き方』編集室（2018）地球の歩き方　2018～2019　ブータン　株式会社ダイヤモンド・ビッグ社

4）角谷昌典（2014）ブータンの教育政策動向（内外の教育政策動向2013，V　内外の教育政策・研究動向）日本教育政策学会年報　21　221-228

5）NHK「ドキュメンタリーWAVE」取材班・アグネス　チャン（2013）ブータン　幸せの国の子どもたち　東京書籍

6）大橋照枝（2011）ブータンのGNH（国民総幸福）国家経営に学ぶ　－日本の小規模自治体でもとり組める－　神奈川大学国際経営研究所　マネジメント・ジャーナル　3　5-20

7）安井眞奈美（2000）（ブータンの出産習俗：出産観の理解にむけて　ヒマラヤ学誌，7　61-78

8）黒岩千恵子（2007）ブータンの子どもの生活と遊びの変容　スポーツ人類学研究　9　53-72

9）前掲8）

10）前掲4）

11）前掲4）

12）前掲2）

13）前掲4）

14）前掲8）

15）前掲5）109-107

16）藤田一照（2014）〈特集論文：日本における“マインドフルネス”の展望〉：「日本のマインドフルネス」へ向かって　人間福祉学研究，7（1）　13-27

17）林紀行（2014）〈特集論文：日本における“マインドフルネス”の展望〉：マインドフルネスとエビデンス　人間福祉学研究，7（1）　63-79

付記

本研究は，平成30（2018）年度福山市立大学重点研究の助成を得て研究したものである。研究課題「就学前教育・初等教育における幸福度に関する研究」（研究代表者林原　慎）

（2019年10月23日受稿，2019年11月26日受理）

Bulletin of the Faculty of Education, Fukuyama City University, vol. 8, pp. 35–43, 2020
doi: http://doi.org/10.15096/fcu_education.08.04

Report of Research Study on Preschool Group Education in the Happy Country of Bhutan: Onsite Surveys of Three Private Preschool Facilities

KOBAYASHI Sayoko [1]

Onsite surveys of preschool group education facilities were conducted in the kingdom of Bhutan, a country with a high level of subjective happiness. Three private preschool facilities participated in these surveys. The principals and teachers at the facilities agreed to be interviewed. The three facilities had the following in common: there was a fee for attendance; the facilities had their own buses; services were available for children aged three and up; lessons included practicing reading and writing; instruction was in English; children were required to bring their own lunches and water bottles; and there were two different time schedules available. The effort put into teaching reading and writing was very different from preschool in Japan. Observations found that all students held their pencils correctly. This is likely due to thorough one-on-one instruction provided by the teachers. In the oldest class, the way the students sat at individual desks and learned reading and writing was similar to elementary school education in Japan. This is probably related to the fact that one year of education prior to starting elementary school is required in Bhutan. In addition, the availability of two different class schedules at these facilities is similar to the current system of certified centers for early childhood education and care in Japan. Future research on this topic could contribute to early childhood education in Japan.

Keywords : Gross National Happiness (GNH), Kingdom of Bhutan, Preschool group education, Private Kindergarten

[1] Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University